

『七言詩』



モスガルは、今思えば星のきれいな町だったのだと思う。決して短くない時間をここで過ごしてきたが、そう思え

濃藍のキヤンバスを飾るのは、輝きを放つ無数の星たち。その名前などもちろん自分は知らないが、あれらは數百年変わっていないのだとリンウェルが言っていたことを思い出す。

この地で初めて旅に出た時、アルフエンがダナにやつてきた時、いやそれよりも昔、三百年前にレナが進行してきたときからこの星空は変わらないのだ。ならば今さら手に掴めないそれらを、どうして綺麗に思うのか。それはきっと自分のあり方が、心が変わったからであろう。掴めない星に手を伸ばすこと。それは、もう苦しいことではない。偏っていた星靈力が世界に行き渡るようになり、人々を苦しめていた業火はいつの日か、人々の心に熱を与える光となつた。希望を探すことすら諦めていた瞳が、星空のよくなきらめきを浮かべて明日のことを話していることが、ただ嬉しかつた。

カラグリアとは異なり人口も比較的も少なく、まだまだ発展途上にあるモスガルだが、今日はやけに賑わっているようだつた。不思議に思いつつも、世話を焼いてくれた恩人のもとを訪れようとすると、以前よりも背丈がのびた少年がアルフェンに気がつき走つ

て来る様子が見えた

来てたんだ、ちょうどよかつたとココルは嬉しそうにはにかむ。まだまだ食べ物も十分ではないとはいえ、奴隸時代と比べれば満足に食べることが叶い、また必要な栄養も確保できた。成長期の少年はきっとこれからどんどん大きくなるだろう。装甲兵から鞭打つことは二度目だ、さすがに歳をやめ。

「どうした？　なんだかやけに賑わっているな」「何っておぬし、今日がなんの日か知らんのか」布を張り合わせただけの簡素なテントから出てきた老人は、呆れながらも慈愛に満ちた目をアルフエンに向かえた。

「門……。炎の門か」
ドクが指差した方角は、積み重なった岩石を優に越えるほど大きい、炎の門があつた場所。人々の星靈力を吸収し、命すら焼き尽くしていた象徴でもあるそれは、紛れもなくアルフエン達によつて壊された。その日から壁はなくなつたのである。

『だいじなひと』

「門……。炎の門か」
ドクが指差した方角は、積み重なった岩石を優に越えるほど大きい、炎の門があつた場所。人々の星靈力を吸収し、命すら焼き尽くしていた象徴でもあるそれは、紛れもなくアルフエン達によつて壊された。その日から壁はなくなつたのである。

「なんだか懐かしいな。もうそんなになるのか」
この地でシオンと出会って、カラグリアを解放して、仲間と出会って。世界の理に気が付いて、シオンを救いたいと思い、〈薊〉から解放して。必死に走ってきたからなのか、不思議と長いとは感じて、いなかつた。道中いつも夢に思い描いていた光景は、今こ

「そうだ！ これ見てよ！」
うしてアルフエンの目の前にある、

「トクは書かれたんだ……まだ練習中だけど」
紙を開くと、そこにはたどたどしい筆跡でいくつかの言葉が書かれていた。
『なまえ・ココル　だいじなひと・ドク、アルフェン、シオン』
「これは……？」

ら文字の読み書きができるもんは少ない。わしみたいな少し覚える人間が、合間を

みて教えるんじゃ」
ダナ人はゆりかごから墓場までずっと奴隸のままだった。モスガルでは特に肉体労働

方が多い。
それよりも驚いたことがひとつ。『だいじなひと』の欄に、ドクと自分でなく、

「シオン……」

そうアルフエンが呟いたのを聞いたココルは、

た。ドクもまた穏やかな微笑みを浮かべている。